

2020/11/16 タ刊 (河北新報)



まちスプでは、地域住民らによる意見や情報の交換が行われている

新型コロナウイルスの影響下、運営している地域交流スペースを手探りながら営業再開し、早いもので数ヶ月がたつ。「まちづくりスポット仙台」(まちスプ)は、仙台市郊外にある商業施設内に拠点を置く、地域の方が買い物ついでに立ち寄れる交流スペースだ。

近隣の方や来館者との対話を通じ、小さな挑戦を後押しする。日々、さまざまな世代の声に耳を傾けていると、予測できない時代の変化に伴うさまざまな社会課題の波がひたひたと足元に近づいてきていることを感じる。

例えば、台風と新型コロナウイルスが同時にやってきて、ソーシャル・ディスタンス(社会的距離)の確保のため急ぎよ避難所を建設しなければいけなくなつたこと。郊外の一軒家に1人で住む高齢者世帯が増えている中、台風の規模

にかかわらず不安から避難する人と、安否確認などをする町内会の対応を考えていきたい。

転入したてで町内会活動になじめない世帯がいることもよく耳にするので、多様な目線に立った情報発信や備えが日頃から必要なことを改めて考えた。

明るい話題ももちろんある。まちスプの近隣には18の教育機関、四つの連合町内会があり、約1万3000世帯が暮らしている。「各組織や地域が連携するだけでももつと面白いことができそう」という前向きな相談も多い。

まちスプと連携が始まっている泉館山高からは、「探究学習」の一環で「高校生の目線を地域課題に生かせないか」と相談を受けている。想像するだけで面白い。折しも、市は次期総合計画の中で重点的に推進するプロジェクトの一つに「地域協働」を掲げる。さまざまな団体や世代、仕事を捉える「多様性」を力に変えていくことが、地域の魅力を上げるきっかけになりそうだ。

まずはお隣さんを知り、声を掛けることも、大切な挑戦だ。人口が多いからといって、「誰かがやってくれるでしょう」「まだ大丈夫でしょう」となっていないか。自らに常に問い合わせながら、つくっていく楽しさを大切に、毎日を過ごしたい。

わたしの 視点から



岩間 友希

特定非営利活動法人
まちづくりスポット仙台
ディレクター